

CONTENTS

- 巻頭言「アジアの女性作家と『ことば』」
- 特集：第74回全国学術大会報告
- 第75回全国学術大会自由論題・テーマ分科会募集のお知らせ
- 事務報告
 - 2024年度臨時常任理事会議事録
- 地域部会報告
 - 2024年度東海部会第20回研究集会
- お知らせ
 - 学会ホームページのリニューアルのお知らせ
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

■ 巻頭言

アジアの女性作家と「ことば」

神谷 まり子（日本大学）

2024年のノーベル文学賞授賞式が去る12月10日、スウェーデンのストックホルムで開催された。受賞したハン・ガンは、アジア人女性としては初めてだという。戒厳令下の韓国で民主化運動が武力鎮圧された光州事件を描く「少年が来る」（2014年）など、すでに多くの作品が日本語に翻訳されており、ノーベル賞受賞を期に本を手にとった人も多いだろう。今回、授賞式の直前にユン・ソンニョル大統領が非常戒厳を宣言し、軍が国会に突入する事態が起きたことも、偶然にしてはあまりにも衝撃的だった。ニュースで、国会関係者たちが軍の侵入を防ごうとイスやソファーでバリケードを築く映像を見て、なぜかその動作が妙に手慣れているように見えたのは、果たして私だけだろうか。ふだん、我が家の中学生の娘のおかげでK-POPの洪水に晒されていたせいも、この二つの出来事が記憶の奥にぼんやりとあった韓国の姿を、浮かび上がらせてくれたのだった。

今日はそんな「にわか読者」の私が、アジアの女性作家による、「ことば」をめぐる作品についてすこし考えてみたいと思う。ハン・ガンが授賞式に先立って行った講演「光と糸」では、これまでの作品が、たたみかけるように自らに発した問いを受けて創作されたものだったことを明らかにしている。なぜこの世界はこんなにも暴力と苦痛に満ちているのだろうか。それと同時に、どうして世界はこんなにも美しいのだろうか。鎖やドミノのように連鎖する問いの先に作家が見出したのは、自分と他者とのあいだを橋渡しする「ことばという糸」の存在だという。小説「ギリシャ語の時間」（2011年）のなかに、こんな人物たちが登場する。離婚して家族を失い、言葉を話せなくなった女性主人公と、もはや実用的なコミュニケーションとしての

役目を失った古典ギリシャ語の講師の男である。男はまもなく自分が視力を失うことを知っており、静寂と闇に包まれた部屋のなかで、主人公は彼の手のひらに、指で字を書く。その感触のなかに互いの「光輝く瞬間」が訪れるのだ——主人公にはおそらく、けっして和解できないと捉えるこの世界と、ほんのつかの間かもしれないが「糸」でつながった瞬間に思えたに違いない。「ことば」は自分と世界を繋ぐ接点であり、いとおしく、はかないものである。

言語の修得が新たな世界へ繋がった作家として、イーユン・リーがいる。イーユン・リーが北京大学を卒業後に渡米し、そこで専門の免疫学の研究をしながら英語で創作をはじめた経歴は、あまりにも有名である。文化大革命後に政治犯として処刑された女性の周辺で引き起こされる市井の人々の悲劇を描いた「さすらう者たち」(2009年)、北京で起きた女子学生毒殺未遂事件と、その後の関係者たちの孤独な運命を描いた「独りでいるより優しくて」(2014年)など、数々の長編小説が代表作に挙げられる。だが私は、短篇小说「千年の祈り」(2005年)が好きだ。この小説は、離婚した娘を慰めようとアメリカを訪れたシさんを描く。なかなか話をしてくれない娘に苛立ちを覚えるシさんに対し、娘はこう言う。「英語で話すほうが簡単なの、中国語ではうまく話せない」。シさんは中国で国家機密を担うロケット工学の科学者として(のちにここに大きな嘘が隠されていたことが明らかになるのだが)家庭ではいっさい話をしなかったため、父娘は互いに語り合う「ことば」を持たない。いつしか英語で話すようになった娘が、はじめて自分を表現できる手段を得て「新しい人間」になったことに、シさんは戸惑いを隠せない——「ことば」には、その「ことば」のなかでのみ生まれる世界がある。それに気がついたことが、おそらくイーユン・リーの創作の原点にあるのではないか。彼女が英語で創作することにこだわり、また作品の中国語訳も拒絶している理由が、ここにあると思われる。

いま「ことば」を手段と言ったが、おそらくこれは適当ではないだろう。「ことば」は、それに先立って存在する世界にただ単に形を与えるのではなく、むしろ世界自体を生成すると言ったほうがいいかもしれない。ふと、こう考えたところで、多和田葉子の言葉を思い出した。母語の外へ出ることで、言語のなかに潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を見出すことが可能となる(『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』)。ドイツ在住の多和田葉子の最新作「白鶴亮翅(はっかくりょうし)」(2023年)は、あらゆる意味で予想を裏切る作品だ。ベルリンで翻訳家として一人で暮らすミサは、東プロイセン出身の隣人、Mに誘われるまま、太極拳学校へ通うことになる。そこで出会ったのは、ロシア人富豪の未亡人や、ヘンゼルとグレーテルが出てきそうな森でひっそりと店を営む菓子店店主、BBCアナウンサーのように話すフィリピン人英語講師に、妊婦の妻・クレアに付き添って通う夫のクレオ、そして「チャンチュン」出身の太極拳講師、チェン先生であった。さまざまな歴史や背景、思いを抱えた人々を、太極拳の動きが大きな翼で力強く包み込むように守護する——タイトルにもなっている「白鶴亮翅」は、二十四式太極拳のうち、第三式の動きである。多和田葉子と太極拳という異色の組み合わせに興味を持って読み始めた私は、しだいにこれが太極拳についての小説でもなく、また言語の問題を直接扱ったものでもないことに気がついた。強いて言うならば、あらゆるミス・マッチが織りなす不思議な一体感がテーマなのではないか。ここにはもはや狭義の意味での言語や、国家は存在しない。それらは遠く背景に押しやられ、前景に広がるのは身体の「ことば」によって繋がる人間たちの、どこかメルヘンタッチの、広大無辺な世界にも見えるのである。

「ことば」は、繊細でありながらも生命力にあふれ、時に姿を変えながら、豊かな世界をも

たらず。これらのことを、アジアの女性作家たちは私たちに教えてくれるのである。

■特集：第74回全国学術大会報告

2024年10月19日、20日の2日間にわたり、法政大学を主催校として第74回全国学術大会が開催されました。共通論題、各部会・分科会の責任者より総括をいただきましたので、特集として掲載いたします。

【共通論題】「習近平の「融合発展」戦略と台湾」

共通論題は、昨年「台湾有事」などと絡めて話題にされがちな台湾海峡周辺の状況について、中国側の視点、特にその台湾政策の基軸である「融合発展」に焦点を当てつつ、台湾側の視点を取り入れながら総合的に議論したシンポジウムであった。

第一報告の鈴木隆会員（大東文化大学）「ありえたかもしれない、そして、今後ありうるかもしれない、いくつかの「融合発展」—福建省党委員会時代（1996-2002年）の習近平の政策情報環境を手がかりとして—」は、習近平の福建時代にこそ台湾認識の古層が形成されたと見なし、福州市党委員会書記（1990～1996年）に比して、不明な点が少なくないという省党委員会副書記・福建省長（1996～2002年）の時代の台湾認識の特徴を、福建省党委員会の関連団体が発行する内部発行雑誌の分析を通じて考察する。その結果、厳復への注目などとともに、後の習近平の台湾政策との共通要素が抽出され、また宋濤などの人材の継承性もあることが確認された。

第二報告の下野寿子会員（北九州市立大学）「福建省と『融合発展』—中央地方関係の文脈からの考察」は、2023年9月12日に中共中央と国務院が発した「福建省が海峡兩岸融合発展の新しい路を探索し、兩岸融合発展の模範区を建設することを支持することについての意見」に着目し、福建省という現場での台湾政策の意味付けや政策の実態をこれまでの対台工作の経緯、背景を踏まえて考察した。その結果、2023年9月の「意見」が金門と馬祖、平潭を拠点に指定していることも、従来から福建省の兩岸融合発展が金門、馬祖との融合に絞りつつあった従来の政策の延長上にあること、また福建省政府が台湾政策を糧に中央と関係を作り、資源を獲得することができることを指摘した。

第三報告の松本充豊会員（京都女子大学）「『融合発展』戦略とエコノミック・ステイトクラフト」は、中国の台湾への浸透工作の事例として、中国が重点工作対象とする若者への支援策を取り上げ、その実施過程を検討して、中国の利益供与型ESの有り様を考察する。その結果、この政策には台湾側の需要もあり、またその効果も見られるし、将来的に展開していく可能性もあるが、政策実施過程で台湾青年に利益が行き渡らないことや、中国の青年との競争が生じることなどといった問題を抱えており、目下の状況では十分な効果が期待はできないことを指摘した。

第四報告の福田円会員（法政大学）「『融合発展』戦略と金門島」は、廈門と金門島の間での「融合発展」の進捗状況について、現状を把握し、今後の趨勢を見通すことを目的とする。その結果、金門島は習近平政権の「融合発展」政策の主要対象ではあるものの戦略通りの統合は難しいこと、また実態としての両者間の交流は継続するものの結局現地の論理だけでは動かない面があり、北京＝台北関係の影響を受けること、それでも一定の政策成果を上げる（ことに

するために)、中国共産党にとって金門の利用価値が上がっていく可能性を指摘した。また、今後の展望としてインフラ建設の帰趨、台湾の頼清徳政権の離党政策の展開、金門島内部の世代差、金門島の国際化などに注目する必要性を述べた。

これに対して、黄英哲会員（愛知大学）、川島真会員（東京大学）から、台湾側社会からの観点、また北京・台北・福州・廈門・金門などのそれぞれのアクターから見られる立体的な融合発展のイメージ、利用されるプラットホームとしての融合発展像について質問がなされ、活発な議論がかわされた。〔記：川島真〕

【自由論題1：歴史・文化1】

報告者名：肖童

タイトル：近代日本人の長江中流域認識の変遷—憧れと現実のはざまで—

報告概要：19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本の商船会社等が長江の航路を開拓した。それにともない、多くの日本人ジャーナリストや作家、留学生などが、長江中流域を旅し、旅行記を刊行した。この時代に刊行された長江中流域の旅行記には、著者たちの二つの矛盾したイメージが投影されている。まず、当時の旅行者たちの旅の動機は、今日のコンテンツツーリズムとも言えるものであり、中国古典籍に描かれた憧れの対象にあった。他方で、滞在先の衛生問題や景勝地の西洋化などがネガティブなイメージとして当時の旅行記に記述されている。報告者は、こうした記載内容の整理を踏まえて、当時の日本人の長江中流域に対する「まなざし」の変化を次のように分析する。まず、古典籍に描かれた通りに眼前に現れる長江中流域の風景に対しては、ロマン主義的まなざしが向けられている。そうしたまなざしは、衛生状況などの現状を目の当たりにして、「蔑視」の態度へと転換する。さらに、西洋化され、近代化された景勝地の風景に対して非難のまなざしを向けており、一見して矛盾したまなざしが、当時の日本人旅行者の長江中流域認識を形作っていた。同報告に対してフロアから活発な議論があり、特に当時の日本人旅行者のジェンダーや階層を考慮する必要があること、他の旅行記分析との対話を促進することが期待されることなどが指摘された。

報告者名：楊小平

タイトル：20世紀初期における中国神話学の発生と日本
発表辞退

〔記：木村自〕

【自由論題2：台湾・香港】

本分科会では台湾と香港に関係して以下の三名の報告が行われた。

任鵬飛（東京外国語大学・院）の報告「日本植民地時代における台湾の自治思想の発展」は、日本植民地時代における台湾の自治思想の発展を考察し、特に蔣渭水の活動を通じて中華民族主義が台湾の自治思想とアイデンティティ形成に与えた影響を明らかにするものである。日本の統治下で、台湾の自治思想は当初独立志向が強かったが、1910年代以降の教育水準の向上や民族自決の影響を受け、次第に自治志向へと発展していった。蔣渭水は台湾文化協会を設立し、日本の同化政策に対抗しつつ、台湾人が中華民族であることを誇りにしながらも、独自の文化

と自治を求める基盤を築いた。蔣は台湾人のアイデンティティ形成に大きな役割を果たし、戦後の台湾憲政思想にも影響を及ぼした。蔣渭水が中華民族主義を台湾社会に適応させ、台湾人の自治意識を強化した過程を明らかにし、彼の活動が現代台湾の自治思想に与えた歴史的意義を再評価することを目指す本報告に対し、会場からは、蔣渭水研究の蓄積の中における本報告の位置づけや、蔣渭水の具体的なテキストの提示にもとづく分析が欲しいといった反応があった。

張宇博（早稲田大学）「香港と台湾をつなぐもの－近年の香港映画に描かれる「台湾」を中心に香港映画に描かれる「台湾」－は、近年の香港映画における台湾との関係の描写とその構築方法を考察するものである。従来の香港映画では、台湾は自然豊かな観光地や後進的な集落、脅威を孕む場所として描かれ、香港と台湾の間に明確な隔たりが強調されていた。しかし、近年の作品では、これらのステレオタイプが再解釈され、より複雑で相互作用的な関係が描かれている。具体的には、『轉弯之後』と『作詞家志望』（原題：『填詞L』）では、香港住民が台湾へと越境し、台湾との関係を積極的に模索する姿勢が示されている。両作品は、台湾が香港住民にとって「異郷」から物理的・精神的な居場所へと変わる可能性を提示しており、その背景には、香港住民が台湾との接触を求める意志や、両地域間における制度的支援の存在がある。これにより、香港を「家」としつつも、別の場所で居場所を模索する香港住民の複雑な心理が浮き彫りとなっていることを論じた。会場からは、香港映画のジャンルの相違にもとづく台湾表象の違いや、香港映画における東南アジア表象との対比などについて質問があった。

小栗宏太（東京外国語大学）「日本における香港ポピュラー文化受容－1990年代アジアン・ポップ・ブーム期の刊行物を中心に－」は、1990年代日本における「アジアン・ポップ」ブーム、およびそれと連動した「香港明星」ブームに関連する刊行物を分析するもので、主に以下の2点が指摘された。一つは、この時期の音楽評論はアイドルへの関心を中心とした「ミーハー」なものとなりがちだが、執筆者の面から見ると1980年代の民族音楽、ワールドミュージック系音楽評論との連続性が見られること、もう一つは、2000年代半ばごろから、これまで香港を中心に上げていた雑誌が韓国および台湾中心にシフトする傾向が見られることである。そして、1990年代のこのブームが、かつての民族音楽消費と韓国を中心とする今日的なアイドル消費という一見性格の異なるアジア芸能消費を架橋する可能性を秘めた重要な過渡期であること、にもかかわらず沈静化以降、ほとんど語られなくなったことを指摘し、今後の更なる記憶・記録の掘り起こしと歴史の整理が求められると結論づけた。会場からは、ブームの性格や仕掛け人の有無、当時活躍した音楽評論家たちの仕事とその後に関する質疑や、90年代のブームを経験したり見聞した当事者からの感想もあった。〔記：大東和重〕

【テーマ分科会1：商務印書館と中国現代文化の形成】

分科会当日、余裕をもって会場に着こうと張稷氏とタクシーに乗ったところ、東京ハーフマラソンの交通規制にかかり、タクシーが法政大学に近づけず、逆に10分程度遅刻した。改めてお詫びをしたい。分科会は瀬戸宏「商務印書館研究の意義」、張稷（中国・商務印書館、南京大学）「商务印书馆与中国现代文化的兴起-以清末民初到五四时期为中心」の二報告で構成されていた。

瀬戸報告は日本語・中国語双方でおこない、まず日本の商務印書館研究の概要を回顧し、

日本の研究は清末民初の金港堂との合弁問題に集中していることを紹介した。続いて樽本照雄、稲岡勝氏らの研究に依拠しつつ、商務印書館と金港堂合弁内容を概観し、商務印書館にとって合弁による資金獲得以外にも、当時の最新印刷技術や教科書編纂技術の受容など非常に大きな成果があったこと、商務印書館の基礎は金港堂との合弁時期に固まったこと、それにもかかわらず、その後の中国側商務印書館研究では、金港堂との合弁がほとんど黙殺されていることを指摘した。

張稷報告は中国語で行われ、まず商務印書館は中国近現代文化の巨大な存在であることをその歴史や概況から説明した。次に、商務印書館が中国現代文化の興起に果たした役割について、教育救国の理想の樹立と民間出版機構への魂の注入、商務印書館出版活動の中国現代文化形成に果たした役割、商務印書館と現代文化諸事業の創立と発展、印刷技術の導入と文化教育の繁栄、革命の大本営としての商務印書館-現代文化の別の側面の四方向から清末民初・五四時期の商務印書館の歴史的意義を詳細に説明した。張稷報告は豊富な画像資料を用いた充実した内容で、そのため質問が分科会終了まで途絶えなかったのは幸いなことであった。なお商務印書館は金港堂との合弁契約書(合同)など合弁時期の歴史資料を隠匿しているのではないかと、どの日本の一部の研究者の説に対しては、合弁時期の資料は1932年の上海事変の際に焼失しており故意に隠匿はしていない、と張稷氏が明確に述べたことを記しておきたい。〔記：瀬戸宏〕

【自由論題3：政治・経済】

本セッションは伊藤亜聖会員(東京大学)の「データとしての習近平重要講話」、相川泰会員(公立鳥取環境大学)の「中国環境問題の近況(2024年版)」をテーマとする報告から構成される。

伊藤報告は欧米の中国研究における権威主義体制への関心の高まりや量的テキスト分析の発展、現地調査の困難化という問題意識の下、一般公開の「習近平重要講話=Xi-database」をデータとしての意義を強調し、Xi-databaseの特性、抽出方法などを詳らかに解説した。さらに、関連する既存研究を紹介しながら、Xi-databaseの利用可能性または価値を明らかにしている。

様々な公式統計(業務統計、サンプリング調査、センサス)、大学など研究教育機関の開発した全国調査のマイクロデータ、藍皮書といった年次出版の分野別報告書、さらにウェーバーをはじめとするSNS情報など、実に今日の日本でも氾濫するほどの中国情報にアクセスすることができる。現地調査が難しくなっているというだけでは中国研究が冷戦期に回帰したというのは言いすぎる。今や、情報が少ないから困るのではなく、溢れる情報をどのように料理するかは重要性を増す。何を見るかによって見えてくるものは当然異なるが、様々な手法を駆使して玉石混交の中国情報を効率よく捌くことができれば、現代中国の動きや本質的な変化または不変化を把握することはかなり可能である。伊藤報告はそのよい例として重要な示唆を与えてくれる。

相川報告は国際機関や中国政府の公式統計などを活用して、中国環境問題の近況を報告している。気候変動に関わる温室効果ガスの排出量は総量で世界一であり、1人当たり排出量も増える傾向にある一方、大気汚染の元凶であるPM2.5等の汚染物質や河川汚染を引き起こす廃水の排出状況に関しては、概ね改善の傾向がみられるという。

所得水準の向上に伴い、住民は生活圏内の排気ガス、廃水、固体廃棄物という旧来型環境汚染に敏感に反応し、それらを排出する企業に反対運動を起こしたり、行政に規制強化を求めたりもする。結果、ローカルな環境問題が解決されやすい。対照的に、温室効果ガスの排出で地球温暖化がもたらされるというようなグローバルな環境問題に対しては、住民の反応が鈍い。日本などの先進国で観測されたこうした住民の環境意識と環境問題の変化との内的関係が中国にも存在するという報告内容は興味深い。また、環境問題と経済発展の関係に関する「クズネッツ逆U字型仮説」が知られ、今後の中国における環境問題の行方を見通す際、それは何かしらの示唆を与えてくれるかもしれないが、悪化から改善への転換がいつ訪れるかは今のところ未知というべきであろう。

30人近くの参加が得られる中、質疑応答も盛んに行われた、とても有意義なセッションであった。〔記：巖善平〕

【自由論題4：ジェンダー】

10月20日13時から2名の研究報告が行われた。第一報告は余楽（お茶の水女子大学・院）の「農民工の子ども世代の県城移住に見る家族関係の変化—湖北省X県県城における住宅購入ブームを事例に」、第二報告は王雅俊（早稲田大学・院）「婚活アカウントにみる中国サブカルチャー愛好者のアイデンティティー変容について」であった。

第一報告は、湖北省X県を例に、農民工の第二世代で、姉がいる「90後」世代の男性に焦点をあて、県城での住宅購入をめぐる農民工家族の動向をさぐった。新型城镇化政策の下、住宅購入促進政策により、県城への移住が促進されている。両親と姉が息子の住宅購入費用の多くを負担し、家族の資本は息子に集中投下される。しかし息子は将来的に同居を必ずしも望まず、「養児防老」という伝統的家族価値観からはずれず。質疑応答では、農村出身の場合、農地や農業はどうなるのか、という質問が出た。これに対して、農民工の家庭では、誰も農業を子どもに継がせたくない、という回答があった。

第二報告では、2000年代以降のサブカルチャー文化の発展に従って増加した愛好者の意識の変遷をあるサブカルチャーサイトの内容で追った。この2010年代に開設されたサイトで、愛好者は当初、趣味コミュニティに強い帰属意識を持ち、ハイコンテクストで会話し、ジェンダー意識も先進的という傾向が見られた。趣味が一致する結婚相手の募集広告を掲載し、実際に結婚に至ったケースもあった。しかし、2020年代に入ってからこのサイトに集う愛好者は、保守的になったとする。質疑応答では、愛好者が別の交流サイトに移ったのでは、という質問や、LGBTの動向についての質問が出た。

いずれも、若いネイティブ研究者ならではの調査に基づく報告である。高度消費社会となった2020年代中国社会において、家族的価値観や社会規範が変容したり、かえってジェンダー観が保守化したりしている可能性があることが示唆された。〔記：松本ますみ〕

【自由論題5：歴史・文化2】

本セッションでは二つの報告がなされた。吉川次郎会員（中京大学）による「清沢淵の中国認識——ジャーナリストとして観た1920年代の中国」と、李昱会員（愛知大学・院）による「満州建国大学「研究院」研究動向——『研究院月報』を中心に」との報告であった。

まず、吉川報告は戦前日本の著名なジャーナリスト清沢冽の中国観を考察した。吉川会員はまず先行研究を押さえた上で、20年代の清沢の中国取材訪問と清沢の作品に対する分析を通して、自由主義者清沢のこの時期の中国観を吉野作造や石橋湛山との比較と、清沢本人のなかでの変容過程との二つの視点から考察を行った。吉川会員は、若いころ米国留学経験をもつ清沢が米で人種差別を実体験したが、そのことは彼の中国の人々への人間的共感をもつことを可能にさせ、清沢は中国の人々との「自由主義」的連帯を追求したと論じた。

次に、李報告は1938年に開学した満州建国大学に設立された「建国大学研究院」の活動を研究院が刊行した「研究院月報」を中心に分析し、とくに研究院の中に設けられた「常設研究班」と「年度研究班」との具体的な研究内容に焦点を当てて、時代の変遷とともに変化していく研究班の研究重点について考察した。李報告によれば、研究院の研究は当初、学術研究や「満州国学」の構築など満州文化への寄与を目指していたが、やがて情勢の変化に伴い、国家の政策の影響を次第に強く受けるようになり、自主性を失うこととなった。

最後に、質疑応答では、吉川報告に対して、会場から清沢の中国認識が比較的「浅かった」という問題と彼の中国観の同時代での影響などに関する質問があった。それらに対して、吉川会員は、清沢の中国認識の「浅さ」はかえって清沢に日中の人々が互いに結びつくことの可能性を信じさせたことができ、また彼のリベラルの立場は日本でより幅広い層の読者を獲得することができたとの考えを示した。また、李報告に対して、研究院の研究動向に対する考察を通して満州国の実態を明らかにするという報告の着目点が興味深いとの評価があった一方、報告の中では先行研究や参考文献を挙げていない、などの問題点が指摘された。また、公刊されなかった資料の可能性への注目が必要であるという助言も為された。〔記：李曉東〕

【自由論題6：文学】

本分科会は以下三名による報告が行われた。

第一報告・陳昊旻（愛知大学・院）「中国文学作品における妖怪概念の変容」は、古代から現代に至る妖怪概念の変遷を考察した。まず、古代の「妖」や「精怪」に注目し、それが出来事から存在へ、そして人格化へ、清末以降の自然科学の普及により、妖怪が自然生物と区別されるに至った歴史的展開を示した。さらに、2000年代以降については、日本のアニメ・マンガ・ゲーム（ACG）の影響や伝統文化復興政策の影響を受け、「中国妖怪」としてナショナリズムと結びつく新たな展開を分析した。フロアからは、今世紀以降の状況に関する研究への期待が寄せられた。

第二報告・楊文溢（京都大学・院）「沈從文「水雲」における「過去」の描き方とそのリアリティ欠如の意味について」は、沈從文「水雲」の自伝性とフィクション性が交錯する特徴を分析し、「偶然」と名付けられた女性たちとの関係を通じて描かれる「過去」が、過去の出来事ではなく、執筆当時の沈從文自身の姿を投影していることを指摘した。この分析を踏まえ、「水雲」創作は、過去の再建、個人の再建、現実空間の再建であり、戦時下における沈從文の現実空間への理解と表現であると結論づけた。フロアからは、沈從文の経歴に関する助言があったほか、報告は緻密な作品分析として好評を得た。

第三報告・楊靈琳（立命館大学）「劉慈欣のSF作品における未来「中国」の「国家」像—『老神介護』『扶養人類』を中心に—」では、劉慈欣「老神介護」「扶養人類」に描かれる

極端な貧富の格差社会を取り上げ、教育の民主化が阻害される中で、AIによる権威主義的支配が格差を固定化する未来像を描いていると分析した。さらに、教育と格差、格差緩和に寄与する中国の大学入試制度、AIの発展やデジタル権威主義に関する研究を提示し、劉慈欣のSF作品が現実社会に示唆を与える意義を評価した。会場からは、物語に基づく文学的分析の深化を求める意見が寄せられた。〔記：上原かおり〕

【テーマ分科会 2：改革開放萌芽期の中国を歴史化する】

改革開放の起点は、公的には1978年とされている。しかし、改革開放は、1970年代初頭から実質的に始まったと理解されたり、1992年の南巡講話から本格的に軌道に乗ったと考えられたりしている。どちらの学説が正しいのかはさほど重要な論点ではないが、確認すべきは、この改革開放萌芽期（1970年代初頭から1992年）を含め、改革開放の歴史が既に30年から50年続いている、ということである。私たちは、その長さ故に、少なくとも改革開放萌芽期については歴史化していい段階に達している。

河合玲佳「改革開放と胡耀邦」は、胡耀邦に焦点をあて、(1)「脱文革」における胡耀邦と華国鋒の協調関係、(2)胡耀邦が政治体制改革において具体的にどのような主張を展開したのか、という二点について再検討した。同報告からは、胡は華の支持の下で「脱文革」を進めたこと、両者の関係は1978年の真理基準論争を経ても大きく変わらなかったこと、胡の「四つの近代化と改革問題」（1983年1月）という講話が改革のポイントになったことが明らかとなった。新田順一「改革開放初期の諮問集団の役割（1977-1987）——非公式性と主体性を中心に」は、改革開放初期の中国における諮問集団がどのような役割を果たしたのかを解明したものである。同報告によれば、一定程度の主体性を有する諮問集団が合意形成に一定の役割を果たしたこと、諮問集団の非公式性が改革の促進に有利に働いたこと、しかし制度的基盤をもたない諮問集団が安定性に欠ける組織だったことが明らかとなった。横山雄大「1980年代中国の政治・経済体制改革のモデルとしてのハンガリー・ポーランド——のちの国際関係学者・王逸舟の視点から」は、中国の改革派知識人たちが自国の政治・経済体制改革のモデルとして、ハンガリーやポーランドの改革をどのように評価していたのかを、のちに中国の国際関係学の第一人者となった王逸舟の視点から検討した。王の両国に対する評価から読み取れることは、彼が想定していた政治体制改革は共産党を包括政党化することだった、ということである。当日は、討論者として李昊氏と加茂具樹氏と網谷龍介氏（比較政治学・ヨーロッパ政治／非会員）をお招きし、約50名の参加者とともに活発な意見交換をおこなった。

本テーマ分科会が改革開放を歴史化するための一つのきっかけになることを願っている。

〔記：中村元哉〕

■第75回全国学術大会自由論題・テーマ分科会募集のお知らせ

日本現代中国学会第75回全国学術大会
実行委員会事務局（加治宏基）

2025年日本現代中国学会全国学術大会は、5月31日（土）・6月1日（日）の両日に愛知大学名古屋キャンパス（名古屋市中村区）にて開催することとなりました。次ページ以下の応募

要項の通り、会員の皆様から自由論題の報告希望者およびテーマ分科会の開催希望者を募集いたします。奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

なお、今大会の共通論題は「アジアのなかの中国 分断のなかのアジア」です。いまから 100 年前の 1925 年、広東省広州でベトナム青年革命同志会が組織され、アジアの民族独立運動における中国の存在を象徴する動きとなりました。過去の 100 年間に大きな視野から振り返るとき、アジアと中国のつながりは確実に深化してきました。他方で、現在、深刻な米中対立を背景として、南シナ海や台湾の問題、あるいは中印国境での衝突など、アジアでは中国をめぐる分断状況が広がっています。本来はアジアをつなぐ機能も果たすはずの「一带一路」についても、中国脅威論の文脈で論じられるケースが多くみられます。

そこで、2025 年度の共通論題では、中国とアジアが互いに浸透し融合する一方で、分断が強化されている現状をあらためて確認し、過去をふまえながら、現在と未来についての討論を展開したいと思います。まず小笠原淳会員から、アジアにおける華語文学・表象文化の広がりについてご報告いただきます。つぎに、熊倉潤会員からは中央アジア諸国と中国との結びつきについて、青山瑠妙会員からはインドをはじめとする「グローバルサウス」の動向と中国について、ご報告をいただきます。最後に濱下武志会員から、中国とりわけ華南地域と東南アジアとのつながりについてご報告いただきます。さらに、巖善平会員と津守陽会員より、社会・人文科学にわたるコメントをお願いし、全体での議論へとつなげていきます。

応募要項

自由論題の報告希望者およびテーマ分科会の開催希望者を以下のように募集します。事務的混乱を避けるために、やや煩瑣なご依頼事項を列挙しておりますことをお許しください。

①自由論題での報告（一人の報告時間は 25 分程度）をご希望の会員は、氏名・所属・報告テーマおよび要旨（800 字程度）を下記⑩の連絡先までお送りください。なお、大学院生は指導教員、またはそれに相当する会員の推薦状（推薦者の氏名、所属、連絡先、推薦理由を記載。書式は自由）が必要です。また、報告者は会員でなければなりません（非会員の場合は下記⑤を参照）。

②テーマ分科会の開催（報告者 2～3 名、約 2 時間）をご希望の会員は、企画者（氏名と所属）、企画テーマ、討論者（氏名と所属）、司会者（氏名と所属）を確定したうえで、下記⑩の申込先までお送りください。分科会は原則として会員で構成するものとし、エントリー後のメンバーの変更はできません。確認のため、報告者、討論者、司会者が会員であるかどうかを明記してください。

③自由論題およびテーマ分科会の応募に関するご連絡は、すべて電子メールでお願いします。その場合、ウィルス感染防止のため、添付ファイルは使用せず、メール本文にテキストで記載してください。なお、推薦状も原則としてメールで作成し、応募者はそれを転送するかたち（メール本文にペースト）としてください。どうぞご理解とご協力をお願いいたします。

④締め切りは **2025年1月31日(金)** とします。

⑤自由論題等での報告を希望される学会非会員の方は、入会申請をしていただいたうえで（日本現代中国学会のウェブサイト <http://www.genchugakkai.com/nyukai.html> を参照）、ご応募ください。入会手続きが報告発表までに完了しない場合でも、応募済みであれば発表は可能です。

⑥大会参加の旅費および宿泊費等は自己負担となります。

⑦報告希望者、テーマ分科会開催希望が多数に上る場合は、内容や会員歴などをふまえて調整させていただくことがありますので、あらかじめご承知おきください。

⑧応募をされた方には、メールにて実行委員会より応募受理の連絡をいたします。メールを送信した後、1週間以内に連絡がないときは、再度メールにてお問い合わせください。

⑨自由論題報告者は、大会10日前の **2025年5月21日(水)** までに報告原稿またはレジュメを実行委員会まで提出してください。なお、パワーポイント等の機器使用を希望される場合は申し込み時に必ず明記してください。

⑩応募申込先は、以下の実行委員会メールアドレスです。

genchu2025@gmail.com

⑪応募のメール送信をする際、件名を以下のようにしてください。

*自由論題への応募の場合は「自由論題」

*テーマ分科会応募の場合は「テーマ分科会」

この機会に当学会未加入の優秀な大学院生の皆様にも、ぜひ入会と報告発表をお勧めくださいますようお願い申し上げます。

■地域部会報告

□2024年度臨時常任理事会議事録

日時：2024年10月24日（木）19:00-20:00

場所：zoomによるオンライン開催

参加：菅原慶乃理事長、中村元哉副理事長、何彦旻事務局長、楊秋麗会計担当理事、加治宏基東海部会代表、西村正男関西部会代表、高橋俊編集委員長、川尻文彦広報委員長、家永真幸年度変更担当理事、阿古智子規約・財政健全化委員

欠席：石塚迅関東部会代表、加茂具樹規約・財政健全化委員、小笠原淳西日本部会代表

*オブザーバー：福田円 2024 年度法政大学大会実行委員長、吉川次郎 2025 年度愛知大学大会実行委員長、花尻奈緒子 NL 担当広報委員

【報告事項】（※敬称略）

1. 2025 年度全国学術大会（加治）

・資料に基づき、加治東海部会代表より 2024 年 10 月 17 日から 20 日までメールで審議・承認された 2025 年日本現代中国学会全国学術大会（5 月 31 日（土）・6 月 1 日（日））の共通論題および自由論題の募集要項に関する説明があった。

2. 学会ホームページ（菅原）

・学会ホームページのリニューアル作業の進捗についての説明があった。

3. その他

・2024 年度全国学術大会について、福田実行委員長より開催状況および会計状況についての説明があった。

【審議事項】

1. 2026 年 5 月の全国学術大会の共通論題の『現代中国』への掲載時期について（2024 年度第 1 回常任理事会【審議事項 3】の継続審議事項）

・資料に基づき、事務局長より 2025 年 5 月愛知大学大会、2026 年 5 月大会の「共通論題」は 2026 年 9 月発行の『現代中国』第 100 号の合併号に掲載し、2027 年 5 月大会以降、「共通論題」は当年度 9 月末発行の号に掲載する事務局案について説明があった。審議をした結果、原案通り承認された。

・ホームページのリニューアル、合併号の発行に伴い、一時的な支出が増えることを踏まえて、より一層学会収支の改善に取り組むべきという問題提起があった。

2. 次回常任理事会日程と開催方法

・2025 年度全国学術大会のプログラムの審議をすべく、2025 年 3 月中頃を目処に 2024 年度第 2 回常任理事会をオンライン開催予定。後日メールで日程調整を行う。

3. その他

・2024 年度総会および 2025 年度全国理事会の開催日程や順番について、菅原理事長から提案があり、意見交換をした。

以上。

■地域部会報告

□東海部会第 20 回研究集会報告

2024 年 9 月 28 日（土）、愛知大学名古屋キャンパス L406 教室において、東海部会第 20 回研究集会が開催された。当日は 20 名を超える会員が参加し、活発な議論が交わされた。

第 1 報告・郭立夫「絶望＝希望」のポリティクス：中国における性的マイノリティの社会運動の感情の政治」

本報告では、中国における性的マイノリティの社会運動が直面する抑圧と感情の役割に焦点を当てている。特に、北京 LGBT センターの運営停止を例に挙げ、中国政府や民間社会、国際的な LGBT 運動との関係を分析している。社会運動において「絶望」と「希望」がどのように交錯し、感情が社会運動の資源として動員されるかを考察し、中国の性的マイノリティが抱える複雑な権力関係や境界線を明らかにしている。

第 2 報告・趙彬「台湾文学における女性同士の表象—邱妙津の『ある鱈の手記』のエクリチュールを中心に—」

本報告は、中国古典文学における女性同性愛関係の描写が近現代文学に与えた影響を検討するものである。1926 年に上海の女性主義雑誌『新女性』で取り上げられたレズビアン風の風習問題を通じて、婚姻制度への不満が女性同士の親密な関係の形成を促した背景を明らかにしている。さらに、台湾文学作品『ある鱈の手記』における女性同士の親密な関係の描写を分析し、近現代文学における女性同士の表象の特徴を読み解いている。

第 3 報告・武小燕「日中の歴史教育授業交流から見えるもの」

本報告は、2023 年末から 2024 年初頭にかけて、中国の 3 つの高校と日本の公立高校で実施された歴史教育における国際交流活動を対象とし、授業展開や教員の歴史思想の相違点を考察するものである。中国の歴史教育では唯物史観と愛国心の養成が重視される一方、日本の歴史教育では特定の史観を持たず、愛国心の養成に対する意識が相対的に低いことが明らかになっている。また、両国の教員が共通して「時空観念」や「史料実証」の方法論を重視する中で、中国側教員は歴史を「科学」として捉え、「唯一」の歴史的真相に近づこうとする姿勢を示す一方、日本側教員は歴史の多様性を受け入れる態度を示すことが指摘されている。さらに、南京の学校で新たに展開された「平和教育」の取り組みが注目すべき事例として挙げられている。フロアからは、中国側学校の意図や知識人の認識に関する質問が寄せられた。

第 4 報告・李偉晨「1920 年代天津における競馬事業とその論争」

本報告は、1920 年代の天津における競馬事業をめぐる議論を検討するものである。近代的な競馬事業を支持する勢力と、それを伝統的価値観の侵害とみなす保守派の対立が文化的次元を超え、天津の政治状況や統治の安定に影響を与えた点を論じている。経済的利益を求めた勢力と伝統的価値観を擁護する勢力の対立が天津の政治的構造を反映していることを示し、フロアからは、上海との比較や 1930 年代以降の展開に関する質問が寄せられた。

〔記：川尻文彦、大澤肇、金湛〕

■お知らせ

□学会ホームページのリニューアルのお知らせ

2024 年 11 月、本学会のホームページをリニューアルいたしました。新しいホームページで

は、会員から提供していただいた写真をふんだんに用いることで本学会が射程とする研究対象地域や研究内容の広がり表現しています。「学会概要」、「学会誌『現代中国』」、「全国学術大会」、「地方部会」、「ニューズレター」、「学会掲示板」、「お知らせ」の各メニューからなるサイト構造は旧ホームページを引き継ぎ、更新頻度の高いページには RSS 機能を付与しました。技術的にはお使いのデバイスに応じてレイアウトが最適化されるレスポンシブルデザインを採用しています。お使いのブラウザに適した RSS 拡張機能やソフトウェアをご確認のうえ、ご活用ください。

以上のアップデートもさることながら、今回のリニューアルで最も重要な変更はサイト全体を WordPress というシステムを使って再構築したことです。このことにより、HTML 言語を用いた煩雑な作業を伴うホームページの更新作業が格段に簡易化されました。表面的には見えにくい変更ですが、この点が最も本質的な改善だといえます。

今後も学会として一層の情報発信につとめていきますので、会員のみなさまには引き続きホームページをご活用くださいますようお願いいたします。

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

三品英憲著『中国革命の方法—共産党はいかにして権力を樹立したか—』名古屋大学出版会
吉井文美著『日本の中国占領地支配—イギリス権益との攻防と在来秩序—』名古屋大学出版会

鄭浩瀾編著『革命と親密性—毛沢東時代の「日常政治」—』東方書店

=====

日本現代中国学会事務局
〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18
一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局
TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039
EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984
広報委員長：川尻文彦（愛知県立大学）
ニューズレター編集：花尻奈緒子（三重大学）
日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====